

てなく保育者の集団思考において大きな役割を果すと考えている。

つまり、「話し合う」ことは、たんにつたえあうということだけでなく、そこに相手の生活体験をふまえた思考の発展がみられなければならない。報告4では、保育者のあらわれを報告したわけである。

しかも、報告3の幼児の「話し合い」では、話し合い——行動——話し合いという保育方法で子どもの具体的思考の発展を促すよう努力しているわけである。

で、これらの報告を通じて私たちに、子どもの発達において主要な役割を果すのは保育であり、さらに、保育者の具体的な働きかけが重要な意味をもつと考えている。したがって私の報告における研究も、「心理教育的実験」であり、今回は、幼児の「話し合い」、話し合い——行動——話し合いという系列の内、ことは——具体的イメージ——ことばという側面を実験のねらいとした。

具体的手続(期間、対象児は発表要項参照)

イ、原文の換言解釈(ハラフリーズ)ロ、ことばで絵をえがさせる。ハ、その絵についてのお話をつくらせる。

経過と中間的結論 (イ)については、ほとんどの幼児は困難。ただし、その話を絵に描かせる。

(ロ)については、約半数の子どもがお話を視覚化している。

(ハ)については、視覚化が十分な子どもは、(ロ)のあらわれと同じ、視覚化できた子どもに再びお話をつくらせ、そのねらいをいわせた場合、(イ)からの発展がみられた。

これだけでははつきりしたことはいえないが、従来、幼児はまわりのものごとを視覚化してみる、つまり、表象も具体的であるといわれている。この実験でも、そうしたあらわれは強く感じられたのであるが、そうした視覚化を仲介にして、さらにことばの(話し合

い)操作を加えると、彼らの表象環の強化が起ることもうかがえる。今回の実験ではそれらのあらわれの可能性をみいだしたにすぎないが、今後、同じ手続、しかも多くの材料によって、さらにこの可能性の検証をしていくことにしたい。

## 幼児の発達と保育期間との関係(その三)

立命館大学 守屋光雄

姫路工業大学 釘宮冨子

姫路短期大学 高橋洋子

目的 前二回の発表につづき、前回とほぼ同一の被験児につき、一年後の調査資料を加えて、一年保育と二年保育との保育効果について比較検討した。

方法 前回同様、K式発達検査、体力検査、社会生活能力検査をおこなう。

結果 次頁の表の通り。

## 両手によるスクリブルの幼児教育における位置づけの試み

愛知県立女子短期大学 平岡節

研究の根拠として

(1) 身体構造の symmetry について

その左右対象は形態的には等価であるが、機能的には非等価であ

り、対象的諸器官のうち、手の非等価性が最も大である。

(2) 成長期の手の機能の分化過程の心理学、生理学上種々の研究結果をみると個人差があり、また児童期になっても利手は作業内容によって異なる。その分化は全幼児期にわたっておこなわれると思われる。

(3) 片手の scribble の幼児期における意義 (プリント参照)

(1)・(2)を考え合わせ、bimanual scribble が幼児の教育上いかなる意義があるか W. Groyinger の研究を参考に実験した。

研究方法 (プリント参照)

結果 (例画を示しつつ説明)

(1) 年令別にその表現形式をみる。

(2) bimanual scribble は呼吸運動に合致する。

(3) その表現形式は連続的に変化・発展する。4才頃までは運動的リズム感による。次第に視覚的リズム感による活動をみる。形の認識の発達期を示す。意識的描画の態度なし。また基本的表現形式のすべての pattern を創造する。

(4) 形の調和に対する興味を示しはじめる。

(5) また概念的描画意識をくずすのに役立つ。

(6) bimanual scribble は描画活動、情緒的開放形に対する認識に役立つ。

すなわち身体構造上、手の機能の分化過程にある幼児にとって、

bimanual scribble は、筋肉運動の発達、空間知覚の発達、情緒的開放に役立つのみならず、(内的要求の健全な発達)美術教育の基礎的手段ではなからうか。私も文化、教育の名のもとに、子どものやわらかい感受性と多くの創造への可能性をそこなわないようにしたいものである。

## 幼児画について (その一)

秋田・鶯野中学校 田口京子

姫路短期大学 山本道子

### 幼児画と環境

子どもの描いた絵を通してその性格や精神状態や生活状態を知ろうとすることは近時の一つの傾向である。ここに取り上げた問題は画材としての対象物が何であるか、また、年令、性別、地域的差などによっていかに変化するかを調べた。調査は A B C D E の五項目に分け対象児は五、六才児から九才児である。方法は幼児画と質問紙を用い、項目により個人質問をした。色の調査には標準色紙を使用した。

幼児画の対象に関する調査 (A) 幼児画に描かれる対象、(B) 家族構成と子どもの描く人物画の関係、(C) 絵と玩具の関係、(D) 絵に現われた遊び場所と環境、(E) 両親および子どもの絵に対する関心。

好きな色の調査 以上の項目の調査の結果(A)においては幼児画の対象物は都会の男子では人間に次いで乗物、家の順になっているのに対し農村の男子は乗物より動物を多く取り上げている。女子の場合は都会、農村とも人間に次いで植物、家が多く描かれていた。

(B) の場合、題材となる人間では日常生活で関係の深い人を好きな人として描いている。(C)(D) の場合では最も自分の好む玩具や遊びや、遊び場所が絵に現われている。幼児画には、このように環境が敏感に影響するが(E) の場合では親の絵に対する関心は幼稚園児で